

---

# 騎士と魔女 ~ Knight and witch ~

朱鷺

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

騎士と魔女（Knight and witch）

### 【Nコード】

N9244K

### 【作者名】

朱鷺

### 【あらすじ】

聖女アンヘリカを崇める聖地クローチエ。

かの地を護る神聖帝国の騎士、エウリディオ。

聖地クローチエと対立し、魔術師が育ち、生活するベラルデ山を護る、トルベジノ魔人ナハール。

因縁絡み合う二人は、森奥深くで再会する。

一言葉にするには、危うく。秘めるには、甘美過ぎる。  
血潮あふるる戦場であれば、隠し通せたものを。  
何故。ありえない。  
しかし、ここには二人だけ……

## 1 - 1 . それ以上近づくな

1 . それ以上近づくな

一騎が冥色<sup>めいしき</sup>に沈む原生林を、翔けていく。

黒い戦闘用天馬が駆けるのは、畏れられる森<sup>ベガサス</sup>。

迷いの森。 惑いの森。

誰もが口を揃えて言う森は、入ったら二度と出てこれない。迷って惑い、日没を日の出と間違え、暗闇に囚われる。そのまま、闇に囚われて出てこない。

人の手がほとんど入っていない原生林は、人の侵入を拒むように立っていた。

何もかもが深緑色の闇に溶け込み、物と物との境目が曖昧<sup>あいまい</sup>に混ざり合う。

槍のように鋭い杉がまるで、闇から生えているような錯覚を起こさせる。

脱出できるのか。

愚にも付かない思いがよぎる。

騎士は、長々と息を吐き出すと、馬首を軽く叩いた。

黒い愛馬<sup>あいば</sup>は騎手の命令を受け、ゆっくりと降下していく。

羽がしなる音が、闇と一体化した森に吸い込まれていく。

戦闘用天馬<sup>ヘガサス</sup>からすれば、なんとも飛びにくい森だろう。

着地に備え、身をかがめる。

衝撃に揺られながら、騎手は頭部を覆う面を緩めていった。

若い男だ。

面を取り、新鮮な空気を肺一杯に吸い込む。

密度の濃い酸素が隅々まで行き渡り、戦闘に疲労した身体を生き返らすようだった。

降り注ぐ陽光を糸にして流した髪は、肩まで伸び、白く滑らかな肌縁取る。純度の高い翡翠<sup>ひすい</sup>が、闇夜に煌いた。

その時、颯爽<sup>さっそう</sup>に駆けていく黒い愛馬<sup>あいば</sup>が、首を振った。

「エリージュ、どうしました」

虫でもまとわり付いているのかと、紐を引き締めようとも、黒い愛馬<sup>あいば</sup>の訴え<sup>いば</sup>かけけるような動きは止まらない。

騎手の命令もそこそこに、翼と前脚でしきり動かして何かを訴えている。

馬がしきりに気にする方角へ動いてやると、それも止み、嬉しそうに嘶いた。

「友軍がいるんですか？こんな処に？」

訝しげに柳眉を顰<sup>ひそ</sup>めながら、男は愛馬<sup>あいば</sup>の任せるままにした。

何度も激戦を潜り抜け、豪胆と知られる愛馬<sup>あいば</sup>を男は誰よりも信頼していたから。

ベルラデ山。

古代語で、《天を裂く剣》を冠する山は、大陸南西部にその威容を誇っていた。

クローチエ聖地をも飲み込むその大きさは、人が言葉を覚える前からあったという。

魔神を封じ込めたとも、伝えられるベルラデ山。

凍て付く大気に白く凍った鋭鋒には、大亀裂があった。

まるで山の地中深くから、何かを取り出さんとばかりに引き裂かれた山肌。

その深さは測り難く、それこそ冒険者や王や神官といった権力者から命令を受けた者達が降りたが、誰一人として生きて帰ってきたものは居なかった。

その不気味さ、底知れなさか。

誰が云うまでも無く、地獄に貫穿かんせんしていると信じられている。

しかし、抗いがたい媚香びいこうを放つ毒花のように、その後も人はその禁地に足を踏み入れることを止めなかった。

囚人しけいしゅうや死刑囚しけいしゅうが、送り込まれる流刑地となり。

神がおわす地として、求道者きうどうしやの集う地となり。

さまざまな謂れいわを持つ山には、人に百面を見せた。

あるときは、幻想的に。

あるときは、神の怒りを具現し。

あるときは、地獄じごくの様を見せ付けた。

信仰の対象として、地上の地獄として、神の教えを悟る修行の地として、

聖地とも穢<sup>けが</sup>れた地と、両極端にゆれるベルラデ山を、永久に一つの位置に決定付けた者達が居た。

さすら  
流離う二人の魔術師。

エレメンタル ノウム  
第一元素：地

エレメンタル ウンディーネ  
第二元素：水

エレメンタル サラマンデル  
第三元素：火

エレメンタル シルフ  
第四元素：風

そして、不可視の元素の中でも、使役者を厳選する――第五元素  
エレメンタル  
マナ。

大亀裂から、その第五元素マナが、吐き出されていることに気付いた青の魔術師バームダードと、  
エレメンタル  
ブルホ

紅雷の魔術師ファルズイーンはここを終の住処と決め都を築いた。  
ブルホ

そして、その都で育てられ、第五元素マナを使う術を――魔術を修めた者こそ、魔術師よと宣言した。  
ブルホ  
エレメンタル

それ以外は、道を間違えた者と取り決めた。  
アウトサイダー

魔術師とは何かを明瞭にすることで、確固たる地位を築こうとしたのだ。  
ブルホ

青の魔術師バームダードと、紅雷の魔術師ファルズイーンが彷徨つ  
ブルホ  
さまよ

た時代。

始まりの黄昏と、後に呼ばれたその時代。

魔術師ブルホとは、流れの詐欺師のことであり、まやかしの術で金品を巻き上げるならず者であり、手品師てしなしをさしていた。

第五元素エレメンタルマナを効率的に使うものなど、数えるほど。

その数えるほどの魔術師ブルホである二人は、確実に魔術師ブルホにとっての理想とも言える都と組織を作り、力を示して言った。

川の流れを変え、早ひやうには雨を降らし、嵐をそよ風に。

呼びかけるを行うまでも無く、魔術師ブルホが魔術師ブルホの卵達が、必ずベルラデ山を目指すようになった時。

青の魔術師ブルホバームダードと紅雷の魔術師ブルホファルズイーンの切願せつがんは成就じゆした。

山師やましをも魔術師ブルホとしていた時流はこのとき、一つに束ねられた。

古代神話にある繁栄を具現化するように、山は月が空を支配する刻ときも、光り輝いた。

聖女アンヘリカを中心としたクローチエ教徒達と、歴史的な邂逅かいこうをする——その時まで。

その繁栄は続いた。

―誰？

ふっと、顔を上げた。

暫く耳を澄ますも、あまおと雨音あめしずくぎったと雨あめぎったが滴り落ちる音以外、  
聞こえない。

（疲れているんだわ）

炎に照り返されたその顔かんばせ（かんばせ）には、疲労の色が濃い。

張り付つく髪の毛の気持ち悪さに、女は形の良い眉を思い切りひそめた。  
ベラルデ山を思い起こさせると冷たく冷やかな銀髪を、邪魔とばかりに括った。

サーデイが見たら、どういつかしらね。

（トルベジーノ魔人であろうと、戦場であろうと、女は槍の雨が降ろつともお洒落をしなければならぬのです！）

美容と口うるさい部下を思い浮かべ、女は笑みをこぼした。

一転、物憂げに息を漏らした。

部下達は大丈夫だろうか。

他のトルベジーノ魔人達も。

――………いつにない、激戦だった。

クローチエ聖地に力を貸していた同盟国は、いつに無く多く。

おまけに、クローチエ聖地からの要請で神聖騎士団も参戦していた。

勇猛果敢とベルラデ山でも手放しで賞賛される連中である。

ヘガサス戦闘用天馬を使役する第三神聖騎士団の姿も確認され、圧倒的に不利だった。

【悪夢の白】エルノ・エルスが、機転を利かせ、敵陣営付近に嵐を発生させなければ、戦線はどこまで後退していたことか。

備え付けの薪を、暖炉の中に放り投げ、女は上着を脱ぐと地面に腰を下ろした。

女は傷を負っていた。

白い腕や脚といい、身体中に裂傷や切り傷で痛々しかった。

転移に失敗して、僻地へきちぎったともいえる場所に落ちるとは。

立て続けにおきる戦闘に借り出されたせいなのか。疲労が抜けきらない。

転がる樽に背中を預け、素朴な暖炉で踊る火を見つめていたその時だった。

耳がはつきりと、人の足音を聴きつけたのは。

弛緩していた身体に力が漲る。

警戒心と、微かな恐怖が女の胸を過ぎよった。

結界を張る余裕も無く、簡単な仕掛けしか出来なかった。

迷いの森と呼ばれ、開発もままならない原生林に、誰が入り込むのか。

この小屋を作った地元の人だろうか。

しとしと優しく幹を葉を叩く雨に混じって聞こえてくるのは、人の足音と。

蹄鉄ていてつが草を踏み分ける音。

（馬？馬の嘶きかしら）

農作用の野馬の蹄鉄<sup>ていてつ</sup>にしては、綺麗な音だとぼんやりと考えた瞬間。

足音が止まった。

小屋までは、まだ遠い位置だ。

馬を止めておくとしても、そんなに遠くに括らなくても、小屋の隣には馬屋がちゃんとあるのだ。

ひやりと背筋が凍る。

（旅人にしては、気配がない！誰だ―？）

<sup>あまおと</sup>雨音ぎったさえ遠ざかったような静寂が降りる。

産毛がチリチリする。

「《我に真なる世界を視せよ》」

<sup>アメジスト</sup>紫水晶の瞳が、見えない光に煌く。

<sup>フルホ</sup>魔術師だけが見える世界。

そこは視認できない元素<sup>エレメンタル</sup>だけで、出来ているように見ることが出来た。

土は木と水の元素<sup>エレメンタル</sup>で、川水は水と土が微妙に入り混じっている。

明瞭な線をなくし、溶け合い混じりあう世界において、光の網が小屋の中で広がっていく様子が見えた。

### 聖地聖法《捕縛》

—聖法!?

それにしても、やり方が荒っぽい。問答無用とは、きちんと躰られた兵士とは思えない。正規軍ではないかもしれない。

「無作法ね! 《流れるように踊れ! 地の精霊》」

隆起した土くれが鞭のようにしなり、小屋の扉を破壊した。

木っ端微塵こっぱみじんになる扉の破片の向こう。

そこに立つ、逞しくすらりとして見栄えのよい体躯の美しい男の姿に、女は絶句した。

「——どうして!?!」

女の驚愕は、そのまま男の驚愕だった。

火の照り返しを受け輝くのは、どこまでも透き通った美しい銀髪だった。

珍しくも無い銀髪だが、彼が知る限り美しいと打算無く讃えられるのは彼女だけだった。

その髪の毛が飾るのは、白い顔と二つの紫の宝玉。

「どうして、ここに居るのです」

エリージュが案内したのは、獵師小屋だった。

漏れる明かりに、獵師がいるのかと近づいたとき、感じたことのある気配に足が自然と止まった。

戦場で、数えるのがばかかしいほど合間見えた宿敵の気配を間違えるはずも無い。

まさか。そんな馬鹿なと思い、詰問することなく聖法を放ったが易々とかわされた。

ありえない。

ありえない。

どうして、ここに居る。

「……ナハール」

「あら、お坊ちやま」

―…また、痩せたのか。

会うごとに、痩せていくようだ。

戦闘中に、調停中に。

悪戯っぽく微笑む唇に自然と吸い寄せられる。

朝露に濡れた紅薔薇のような艶やかな唇だと思った。

「下賤の女だからって、だんまりはあんまりじゃないのさ？」

見とれていたことに気づき、エウリディオは半歩下がりがけ、憎悪がこみ上げてきた。

腹立たしい。

目の前の下賤な女に、怯えるかのような自分の行動に。

己の不可思議な情動を、幾度と無く煮え湯を飲まされたゆえの怯えと受け取り、エウリディオは舌打ちをした。

この信仰の欠片もない墮落した女に。

まるでちょっと喧嘩した友に対する様な馴れ馴れしい態度に、エウリディオは押し黙った。

内心、荒れ狂う熱を鎮めるために。

冷静に相手にしないと、すぐに足元をすくわれる女なのだ。

以前も、そのままやり込められ、命令違反を犯し、降格されたのだ。

会うたびに、なんらかの被害を受けてきたわが身としては、警戒して当然なのだ。

「うーん。もしかして、頭を打って、脳みそ落としてきたわけ？頭が良くなるお呪いでもしてあげましょうか」

「なっ！《魔と交じる穢れ者》《ペカド》が！」

不愉快を通り越して、憎悪に到達した凍えた声が、女の精美な顔<sup>かんばせ</sup>を撫でた。

彼女は、一向に気にした様子も無く、馴れ馴れしい様子で朗らかに微笑んだ。

暖炉で暖をとっていた様子からも、彼女も濡れたのだろう。

白い絹糸のような髪が、べったりと身体に張り付いている。

要所要所ミスリル銀であしらった革鎧を着込んでいても分る、その柔らかな肢体。

紅珊瑚のような赤い唇。分っているのだろうか、その白い項は、思わず口づけしたく――

（い、ま、何を！）

目を睜り、口を手で覆う。

かつて無いほど、胸中を嵐が吹き荒れていた。

「エウリディオ殿下？まさか、吐きそうなの」

「馬鹿なことを。そんなに、軟弱なわけないでしょう」

亡羊とした面持ちの彼を見やり、ナハールは首を傾げた。

激昂したかと思うと、打って変わってぼんやりした面持ちになる。  
交渉するか思案しているのかと思うと、驚いたように目を睜り、口を覆う。

繊細でいて、男らしさを損なわない目鼻立ち。金を溶かし織り込んだ髪。そして、大地の恵みと豊かさを顕す翡翠あらかわ ひすいの瞳。

いつもは、覇気を感じられるのに、生気オーラの波が激しく揺れている。

（身体の調子が悪いようね。まさか、傷を負っているとか……）

宿敵である自分の前で、弱つているところを見せまいと意地を張っているのでは。

（本当に、男つてっ！変なところで意地を張るんだから。エルドルトみたいに、厚かましくなるべきよ）

厚かましいを通り越して、暴虐無人を地で行く同僚を思い浮かべる。敵を気遣うナハールだが、これには理由がある。

目の前の男は、大陸の中でも血統の良さを誇り、そして軍人としても有能だった。

その血ゆえに役職に胡坐あぐさをかくような愚かな坊ちゃま連中でもなく、油断すれば寝首をかかれるのは必至だ。

といって、見殺しすると、またベルラデ山が政治的にも軍事的にも不利になるだけだ。

仮に、ここで彼を殺し、ここに埋めたとしても。

彼ほどの地位と血統から考えると、それこそクローチエ聖地は文字通り草根を掻き分けてでも探し出すだろう。

アッティバがここに居なくて良かったわ。

トルベジノまと  
魔人の纏め役である壮年の魔人を思い浮かべた。

クローチエ聖地の策略で、父を母を妻を娘夫婦を孫を。

かけがえの無い者達を根こそぎ奪われた彼にとって、彼は――。

聖地で――否。大陸でも名門の嫡子である彼は、絶好の復讐の対象だ。

トルベジーノ  
魔人と呼ばれる、ベルラデ山の守護者たちを思い浮かべ、内心嘆息した。

体力、魔術力、剣術、どれが突出し、戦闘能力が傑出した者達。

他国でいう將軍職であるが、決定的に他と違う特性がある。

トルベジーノ  
どの魔人は、個人戦闘能力が桁違いに常人とかけ離れている。それこそ、他国から人間兵器と揶揄されるほどに。

トルベジーノ  
そして、どの魔人も聖地に対して、突出した並々ならぬ憎悪を抱えているのだ。

トルベジーノ  
現在の魔人の中に、数名そういう者は少ないが。

（悲憤の黒：ジャスティスぐらいかしらね。まともに対応できそうなのは。でも、彼だと寝返られちゃう可能性が……）

それでも、戦場には出てきてほしくない。

自分だって、危険なからだから。

自分だって、聖地を滅ぼしたいと願う一人なのだから。

彼は知らないだろう。

私だって、聖地に家族を奪われた一人なのよ。

部下とかキヴィリトを奪われただけではない。

人生さえも、奪われたのよ。

あんな陰湿な極まりない策を考え出す男ではない。

かといって、正攻法で攻めてくるわけでもないから、やりにくい相手であることは変わらない。

そうだ。

根こそぎ奪うような、尊厳を踏みにじるような策謀を張り巡らしたのは――…。

知らないのだから、仕方がない。

本当に、そう思っているの？

湧き上がる昏い想いを振り切るように、わざとらしく明るく話しかける。

案の定、魔女だ下賤の女だと蔑む相手に話しかけられ、冷たい氷のような美貌が歪む。 s

「調子が悪いなら、焚き火に当たる？」

「ここで、再戦ですか。自ら、間合いに敵を入れるとは、終に諦め

が付きましたか」

「あら。私、しぶといのがとりえだし、坊ちやまがそんな卑怯なことをする人だったなんてね。衝撃だわぁ」

敵意を無いことを示したつもりか。

一歩近づいたナハールに、エウリディオは威嚇を込めた鋭い一瞥を投げた。

やめろ。近づくな。お前を見ると、息が苦しくなるんだ。

会ったたびに、見るたびに、声を聴くたびに、胸が苦しくなる。

それは、政敵にも感じる憎悪をでもなく。

だが、決して不愉快ではなかった。

それは、妻を娶<sup>めと</sup>り子を成し、騎士団長になった男自身、計り兼ねる己の気持ちだった。

（「貴方の―貴方の、魔女を語る様子はまるで―」）

それは、まるで。

一瞬、友に言われた言葉が脳裏を過ぎ<sup>よ</sup>った。

一笑した友の言葉が真実だと？

馬鹿馬鹿しい。

ただ、本能が狂ったように警鐘を鳴らす。

彼女にこれ以上かわるなど。

神聖帝国の公子としての自分、騎士団長としての自分が壊され  
と。

壊されないとしても、彼女とかかわると調子が狂う。

じんわりと熱を持ち始めた身体に、戦慄する。

ここ暫く女を抱いていないからだ。

宿敵とはいえ、疲労し、夢げな姿をさらしているせいだ。

断じて、友の、あの言葉は、違う。断じて、違う。

土の湿った匂い。

埃の匂い。

雨に濡れる木の匂い

しとどにぬれた木の匂い。

それに混じって、確かに匂ってくる。

女の柔肌の匂い。

微かに混じる鉄錆の芳香と混じり、それは男の欲情を煽っていく。

「坊ちゃま、怪我をしているのかしら」

「それは貴女でしょう。それに、粗末な頭とはいえ……。いい加減、人の名前を覚えたらどうです？」

気のせいにしては、芳しい。甘い匂い。

媚香めいこうなのか。

いや、この魔女がその手管を使うような者ではないことを自分は十分に知っている。

この距離がありがたい。

この距離が恨めしい。

「それ以上近づくな」

鋭い拒絶の言葉。

いったん外に出た言葉の凶器は、容赦なく女を切り裂く。

それは、吐き出した意味以上に鋭い刃となって、エウリディオの胸を切り裂いた。

「あら、ひどい」

濡れた唇が微かに動き、戯「おど」けて笑う。

ふざけた言葉のその力なさに。

瞳を過ぎ<sup>よ</sup>った哀しみに。

心を苛む後悔に。

わけの分らない苛立ちに。

エウリディオは強く―血が滲み出るほど、唇をかみ締めた。

## 1・1・それ以上近づくな（後書き）

「憎しみあう5つのお題」は、サイト「翠緑玉の誓文」で連載している、お題短編小説です。

多くの方に、読んでほしくて投稿しました。

全5話構成となっています。

次回の更新は、4/30（金）です。

感想・ご意見を、よろしく願いたします。

## 2・一夜限りの休戦協定

一瞬の間を置いて端正な顔にばつが悪そうな表情が広がる。

張り詰めた空気が、耳に痛い。

霧雨<sup>きりさめ</sup>のかすかな音さえひどく耳障りだ。

「手を怪我しているのですか」

白い肢体がところどころ赤いのは、炎の照り返しだけではないようだ。

部下たちの血か…。

彫刻を思わせるほっそりとした手にも飛び散り、白磁の肌に妖しく映<sup>は</sup>えている。

「まあ、油断しちゃったわけよ」

「それはそれは。貴女に一太刀浴びせるとは、受勲<sup>じゅくふ</sup>ものです」

ナハールは、全身の血が一気に冷えるのを感じた。

それほど、私が死ぬのが嬉しいのだろうか。

憤然とした怒りではなく、何故か悲しみがこみ上げてくる。

「残念だけど。返り討ちしちゃったから、無理ね。たかが、傷をつけたぐらいで受勲<sup>じゅん</sup>なんて、価値が低すぎるわよ。だって、そうですよ。たかが、《魔と交じる穢<sup>じ</sup>れ者》に、人たち浴びせただけで、受勲<sup>じゅん</sup>するなんてねえ」

剣の切っ先のように鋭い笑みだ。そして発せられた言葉も、容赦なく決断を迫るものだった。

「で、どうするの？坊ちやま。やりあうのなら、外でしちゃいましょう。せつかくの雨宿りの小屋を吹き飛ばすのは嫌でしょう？」

「さあ、どうしましょうか。」

「はいはい。坊ちやまは、ご機嫌斜めチューでちゅね」

「ナハールの顔を見れば、一気に地獄に来た気分ですよ。見ているだけで、気分が悪くなります」

「あら。いいじゃない。私といるだけで、地獄に来た気分なんて。お得よお。死ぬ前から、予定地にいけるんですからね」

「娼婦風情が、知った口を利いて。身の程を知らない」

冷たい視線が、痛い。

「ここで、殺しあっても……互いに無事にすまないでしょうし、休戦ということで。明日の朝日が昇るまで、矛を納めましょう」

「一夜限りの休戦協定を結ばうってわけね」

「そういうことです。今、私を殺したら、どうなるか……」

たつぷり時間をとってから、ゆっくりとした芝居がかった仕草で、ナハールを見据えた。

「……なんだかんだ言って兄上様にそっくりよ。坊ちやま。

嘲るように内心呟く。

茶化してでも誤魔化さないと、無理やり眠らせた憎悪が浮上してきそうだ。

気品ある、その仕草。懐かしさと悔恨、そして猛り狂う憎悪を呼び覚ますものだった。

目の前の男より淡い金髪。流水漂う滄海の如き、群青の瞳。なににより、人の感情を伺わせない冷えた眼差しが――。

「どうなるか。粗末な頭を持つ貴女だつてわかるでしょう」

「坊ちゃま、ここでは賢い貴女ならというべきよ。交渉の最後で、貶したら逆効果ですわん」

「その気持ち悪い言い方止めなさい。虫唾が走ります」

なお結構。おぞましい男の弟に、馴れ馴れしくされたら、こちらこそ虫唾が走りそうだ。

でも、似ていないわね。

実際あつたのは、二回ほどか。

好々爺とした外見とは相反し、強烈な存在感を放つ男と目の前の男を見比べる。

あまり、似ていない。

凜とした容姿だけでなく、中身が。

むしろ、彼の兄のほうが、父親に似ていた。

考え方も、容姿も。

オスカル・エルード・レイ・マルチーフ。

誰もが恐れた。彼の父―ルンドクヴィスト大司教を。

不世出の政治家。

それは同時代の人間からしてみれば、もつとも敵に回したくない人間の一人でもある。

国家は一つの怪物である。

後の世、ある政治哲学者は、その論文を書いたとき、必ずその筆頭政治家に彼を上げた。

「完璧にして理想的な政治家」として。

大陸中の利権が絡み合い、ひしめき合う―聖地。

ここ数年、聖地はかつてないほど荒れ狂っていた。

相次ぐ教皇の早死に、そしてそのたびに吹き荒れる狂騒劇。

聖地の矛盾であり盾である神聖帝国内部の不穏な動き。周辺諸国の分裂。

空中分解寸前のかの地をまとめているのは、聖女でも、俗世を離れた聖職者でもない。

神聖帝国七大君の七位―マन्दール家から、ムルティフ家に入り婿になったオスカル・エルード・レイ・ムルティフ。

トルベジーノ  
魔人達の家族を、仲間を殺してきた聖職者。

おそらくナハールの家族を、恋人を、殺したうちの一人。

エウリディオの父。ルンドクヴィスト大司教の印象とは程遠い、繊細な印象を受けた。

忌々しい邂逅から、憎しみあい、殺しあう―聖地とベルラデ山。

その構造は、今も変わらない。

未来永劫<sup>みらいえいじつ</sup>、変わらないだろう。

聖地とベルラデ山のように、己とエウリディオの関係も、変わらない。い。

変わりようがないのだ。

だから、会ったびの切なくなるのは、その未来が辛いだけ。ただ、それだけ―。

なのに、どうしてこれほど胸が疼くのか。

かきむしられるような痛みを覚えるのか。

―気のせいだわ。。

「ひどいわつ。坊ちやまの気に入るように、聖地の話し方をしているだけなのに」

「そのような馬鹿みたいな言い方はしません。もっと、上品です」

心底呆れた顔でいうと、防寒服の釦をはずし始めた。なれないものから見れば、難解な脱ぎ方も慣れているものからすれば、なんでもないのだろう。ブラチナ・ディアマンテ白金金剛石で造られた槍を、分厚い防寒具の上に置いた。カフラス山羊の長靴を脱ぐと、飛行服と一緒に暖炉の前にきちんと並べて乾かしていく。

次の行動に、ナハールはギョツとした。

汗と雨でべたついたシャツを脱ぎ、上半身裸になったのだ。

「ちょっと、全裸になるつもり」

あわてた様子のナハールに意地悪く笑うと、ワザとらしく腕を組んで見せた。

会ったほんろうび翻弄されてきた分、狼狽する彼女を見るのは爽快だった。

「おや、私の裸は価値はないと？それに、下穿したはきはちゃんと穿いているでしょう。細かいことを言わずに、ベルラデ山で自慢するなり、

金を取ればいいでしょう」

「あのねえ。私は、守銭奴じゃないのよ。坊ちゃまみたいな、露出趣味でもないしい」

「言っていないさい。私が風邪を引いて、貴女にうつってもよいというなら、あの姿のままいてあげましょう」

言うなり、まるで小屋の主人の如き堂々とした態度で、暖炉の前に居座ってしまった。

「ちょっとお」

抗議の声を上げれば、ずぶ濡れの下着を乾かさないといけませんとしれっとした様子でのたまい。

そういわれた以上、退けるわけにはいかない。しづしづ彼の隣りで当たる破目になった。

我知らず、遅しい彼の背中に釘付けだった。

細身でありながら、引き締まった腕。ありがちな無駄に筋肉がついた身体でもない。固く筋肉の張り詰めたエウリディオの裸身。

坊ちやま連中のような白アスパラの体ではない、鍛えられた裸体だった。

「寒いわね」

誰に言うのでもなく、独りごちナハールは膝を抱えた。

しばらくナハールも、エウリディオも言葉を発しなかった。

（気持ち悪い）

銀の髪の毛が体に張りついて、離れない。

髪質が良いと羨ましがられるが、この場合はうっとおしい事この上ない。

くくったのは良いが、背中に濡れた手巾を背負っているようなもの。

紐をといた勢いで、水を吸って重くなった髪の毛が、広がった。

舐めるような男の視線を感じたのは。

隣が眩しい。

雲の上にある月が地上にあるようだ。

ひそかに盗み見る彼女は、いつもの飾り気のない服装だった。もつとも、戦装束いくさしょうそくで飾りも何もないのだが。

雪色の髪を、いい加減に結んでいた紐をといた。

流れる清らなる光の奔流に、エウリディオはしばし呆然と思考をためていた。

「坊ちやま？」

甘い思いは、知らない。

父を思うとき。母を思うとき。妻である女を思うときも。

恋人だった女たちといるときも、こんな気持ちになったことはなかった。

「なーに、見てるのさ」

「別に、何も見ていませんよ」

断じて、見惚れてなんかいない。

断じてだ。

「貴女こそ、人の背中とか見て、いやらしいですよ」

「ベルラデ山で自慢するために見ているんだよ」

「男の裸なんて、見慣れているでしょうし」

「まあね。それは坊ちゃまでしょ。神聖帝国では、露出が高いんでしょう？女どころか、男も娼婦並みに、露出が多いって聞くけど？」

「なんですか。それは。貴女こそ、裸に近い格好をして、恥ずかしいとは思わないんですか？呪装じゅうそうかわかりませんが、薄手の革鎧とか」

「なっ！」

見当はずれなエウリディオの非難に、ナハールは目を剥いた。

言いがかりも甚だしい！

「何ですって！言うておきますけどね。好きであんな格好をしているわけじゃないのよ！？そもそもあんたの父親の大司教が、いちやもんつけて、こっちを攻めてくるから、あんな薄手の鎧をつけて、戦う羽目になるんじゃない。」

「誰がいちやもんつけたと！ならず者みたいな言い方をして、ただ済むと思っっているのですか！」

「いちやもんじゃないの！どうして私たちが教皇を殺すのよ！自分たちが後ろめたいから、ありもしないことを言い出して攻め込んでくるんですよ」

違う。

憎悪を含んだ視線に、胸が苦しくなる。それは失望だった。

「なら、どうして。十四年の間に六人も変わることになるんだっ。お前達が、何か仕掛けたとしか考えられないだろう！」

「そんなの、知るわけないでしょっ。人のせいにしないでよね。本当、気位だけは高い連中って嫌ね。気位だけ高くて、中身がカスなんだから。連続変死だって、案外、身内じゃないの？そういうのは身内が犯人なのが、常識つてものよ」

やっぱり、この男も狂信者の一味だ。

穢れ者。忌まわしい。異端。神の名において。

神のせいにしないと人殺しができない、臆病者達。

「聖地で誰かが、殺しているでしょ。犯人の目星ぐらいついていないじゃないの？もしかしたら、あんたのパパとか？」

「貴様っ、愚弄するにも程があることを知れっ」

「あーん。知らないんだ。っていうか、知らされていないんじゃないの。あんただけ、帝国育才なものね。もしかしてえ、見棄てられちゃった？」

入り婿ながら、聖地を取り仕切る父。

長男である兄は手元に置かれ、次男である彼は神聖帝国へ。

何故、自分だけという疑問。

次期マンダール公になるためというが、聞かされた理由だった。

兄はルンドクヴィスト大司教、自分はマンダール公。抜け目のない父が、考えるだろう未来図。

しかし、どうしようもない疑問がだんだんと膨れて。

今にもはじけそうなほど、膨らんで。

どうして、自分だけ。

何故？どうして。自分だけ、神聖帝国で育てられたのだろう。

父も母も兄でさえ会いに来ない。己を、聖地に呼ばない。

兄はそう大司教にならなければならないから。

妹は、聖女に選ばなければならないから。

聖地で育ち、人脈を開いていかなければならない。

己もそうだ。

マンダール公になるには、神聖帝国で育ったほうが有利だ。

そうなのだ。

父たちに他意はない。

「黙れ！」

一瞬にして色を失ったエウリディオは、思ってもいなかった反論を受けた屈辱に燃え上がると、彼女に詰め寄った。

「貴様に、何が分るというんです！？物心つくかつかないうちに、帝国へ行かされて、兄が殺されたら、連れ戻されて！貴様に、何がいくら、父上でも――」

息子を、ほいほいと駒のように……配置変えしても……良い訳が……ない。

そこで、飛び出しそうになる言葉を押しとどめたのは、<sup>フライド</sup>矜持だった。

あの父に、そのような親子の情が通じるわけがない。

言ったところで、気が狂ったかと思われるだけだ。

無関心な上に、愚かな息子だと認識されるのは、辛い。

ただ、兄が死んだだけというだけで聖地に呼ばれた。兄が死ななければ、思い出しもしなかっただろう。

繰上げ嫡子。

「貴方たちが兄を殺してくれたおかげで、私の人生は無茶苦茶ですよ」

（《魔と交じる穢れ者》。さまさまですな。）

（あるいは、兄上の死を見越して入団していたのでは）

（おお。おそろしや。母上似の美貌によらず、狡猾な方よ）

「殺したのは、私じゃないわよ」

投げやりに言い捨てたナハールは、彼の苦悩を読み取ったように睫毛を伏せた。

目を伏せ、微かに俯いたその顔立ち。

その様子に、思わず息をつめる。

帝国の舞踏会で、聖地の教唆会で、風に舞う花のように通り過ぎ云ったどの女よりも清純だった。

だが、エウリディオは確かに嗅ぎ取った。

清純な美貌から確かに匂いたつ、女の――牡を煽る牝の匂い。<sup>あお</sup>

そのとき、何かが狂ったのかもしれない。

傷口を抉られた痛みと怒りと。女への欲情と。

流れるような仕草でのびて来た手が白い頤をがっしりと掴み、強引に上を向いた。

「エウリディオ？」

抵抗を許さない、意思を捻じ伏せる力で甘く赤い華を啄ばんでいた。

「……は……ち……ちよっと！」

からかいにしては、その口付けは永く。

触れる程度だった口付けは、激しく青くなつた唇を貪るものになり。

言い訳のように内心繰り返して言っていた。

苛立ちも切なさも、すべて年下の女に茶化され翻弄ほんろうされている故だと。

自分の中にある興奮をいつに無くふざけたゆえの照れ隠しだと。

「冷たいです」

「いきなり、何をするっ！」

「違います。唇ですよ」

何かがずれている。

触れた唇の感想をのんびりと呟く彼に、ハナールは余裕をなくしていた。

ジェード  
翡翠の瞳でかすかに燃える男の欲望を見てみぬふりをしていたのが、悪かったのか。

《魔と交じる穢れ者》に欲情しまいと、高をくくっていたのが悪か

ったのか。

駄目だ。

自分に覆いかぶさる男の身体に、ナハールは内心焦っていた。

嫌悪でもなく、一瞬で全身を駆け巡った歓びに。

抱きしめられて、嫌ではないなんて。

そんな、馬鹿な。

「……エ…ウリディオ…」

抱きしめられたナハールの耳の辺り。ちょうど、エウリディオの心臓の辺りだ。

彼の高ぶりを表すように音も、早く。そして、暖かくて。

そうだ。

入ってきたときから、様子が何時もと違っていた。エウリディオがいつも向けてくる眼差しとは違う。

山の男たちが投げってくる欲望の欠片が、翡翠ジェードの瞳から見えることに。

うすうすながら、気づかざる得なくて。

（お前がほしい）

愛の言葉を囁かれているようで、落ち着かなかった。

愚かなと、声に出さずに己を冷笑する。

言葉は恋焦がれる者の言葉だが、彼の瞳が言っているのはそれとは正反対のだ。

一瞬でも、劣情れつじょうと、恋情れんじょうを履き違えるとは。

でも、エウリディオ。私は、貴方が嫌いではないのよ。

「ナハール」

「本当、いつもいつも唐突なんだから」

胸に当たる銀の輝きからの囁きは、奇妙に穏やかで。

ともすれば、恋人への睦言むつげんのようで。

——嫌がっていない。

奇妙な確信が胸中に湧き上がると、凶暴じみた興奮が湧き上がり、彼の身体の中で熱となって暴れ始めた。

エウリディオの獣性を刺激するのは十分だった。

首にかかる女の息が熱い。

次がどうなるのか。

ただ抗うことなく、静かに当然のごとく腕を回されていく。

―…何をしている……

胸に腰に女の熱い肢体があたる。

違う。

自分が、己の身体が熱いのだ。

「いつまで？」

「暁鷄きょうけいが啼くまで。それまで、それまでは……」

言葉にしなくても分る。

これは、一夜限りの休戦。

### 3・誰があんな奴のこと（前書き）

すみません。。。（´□、。）。  
おくれて、すみません！

ポイント。いれれくださったかたありがとうございます。（＾　　＾）

### 3・誰があんな奴のこと

「ナハール」

黒曜石を削り嵌め込んだ双眸が、石の不気味に煌いていた。

「ナハール」

それはぞっとするほどの漆黒の瞳だった。ベルラデ山の大亀裂のよ  
うに、底知れない不気味さをたたえて。

当然のように、自分の前に座る男を、訝しげに見やった。

漂白された骨の色をした髪。

血の通わない白い肌。

唯一、色があるのは闇の色。

人間離れた魔人<sup>トルベジーノ</sup>《トルベジーノ》たちの中でも、容姿能力とも魔  
人<sup>ジーノ</sup>《トルベジーノ》離れしている。

それゆえか、悪名も他と比べ圧倒的に多い。

歩く喰屍鬼。白い悪魔。人食い。殺人狂。狂獣。ケダモノ。人でな  
し…

「ナハール」

「何か、御用かしら。エルノ・エルス」

近寄りたがっているくせに、近寄ろうとしない変わった男。

兵営の簡易食堂。

上位軍人であるナハールだが、部下達は先刻の戦闘の後始末と、これからの準備に追われて、すぐ出て行った。

大地腐らす悪竜《エルノ・エルス》<sup>エルノ・エルス</sup>の名のとおり、彼が現れるのはすぐわかる。

簡易食堂の入り口に立った瞬間。

周辺に座っていた兵士たちが、蟻の子を散らすようにさあっと引いていった。

図ったように、食堂隅に集まった兵士たちを眺めやり、

「……訓練の時より、動きが良いわね」

「今度、手伝う？」

何をとほ、聞かなかった。

「遠慮するわ。全員が、失禁したら汚いでしょ。もし、貴方が、後始末をしてくれるというなら構わないけれどね」

「君が言つと、御使いの聖句のように聞こえるから不思議だ」

「それ、嫌味？褒め言葉？」

「褒めている」

「全然、褒めていないわよ」

「ナハールは美しいから、何を云つても賛美歌に聞こえるといっているだけだ」

「……………エルノ・エルス。それ本気で云つたなら、貴方、相当の気障野郎よ」

エルノ・エルス。

誰もが忌避し、唾棄する狂人。

それが、敵味方関係なく。―そして、貴賤共通の彼に対する認識だった。

奇矯なる言動。

狡猾な戦略。

残忍極まりない行動に、子供を踏みにじるのにもなれた奴隷商人でさえ眉を潜めた。

だが、ナハールは彼が嫌いではなつた。

ベルラデ山の魔術師<sup>フルホ</sup>たちも、王国や中立国家元首も、鼻で嗤い相手にしない狂人でも、彼女と老師のことだけはきいた。

「不機嫌」

「そりゃ、そうでしょ。貴方が私になついているおかげで、文句やら殺意やらが私に向いてくるんだからね」

「すまない」

「分っているなら、もうちょっと自重して頂戴」

「それは、無理だろう。しかし、また迷惑をかけたようだ。すまない」

彼女が認めている点。

それは、自分に素直なところだった。

良い意味でも悪い意味でも、自分の欲望に彼は素直だった。

体面やら、意地を張って、何もかもをなくした自分からすれば羨ましい限りだ。

「睡眠不足で、肌が荒れて仕方ないのよね」

「ごめんなさい」

彼が座ってくるなり、さり気なさを装って離れた兵士が驚愕の面持ちで振り返った。

恐怖をしばし忘れた様子で、白い悪夢を凝視していたが、不意に頭痛を覚えたように立ち上がり食堂を去っていった。

恐らく、幻聴が聞こえたと思い、救護室へ向かったのだろう。

「今度から、漏らさない」

何をと、きかなかった。

その代わり、子犬を叱る様に唇を尖らせた。

「余計な殺しをするからでしょ。止めて頂戴」

「ナハールにも近づくなということ？だめなのか？」

何で、そこまで飛躍する。

「駄目なのか」

脅えたような子犬のような目に、ぐっと口を閉ざす。

怖がっているんだ。

彼が自分に好意を寄せているのは知っている。今までも、何度も迫られたこともあるし、彼のように熱っぽい視線を感じたこともある。

だけど、エルノ・エルスは迫らない。

そもそも、彼は自分に愛しているとも、云わない。

好きだといえば、相手に嫌われ、去られてしまふと思っているように。

奇妙な同情と憐れみが湧き上がった。

「駄目じゃないし。それに、アンタのこと、私キライじゃないしい」

「本当」

「本当よ。だって、自分が世界で一番キライで、死んでしまえと思っ  
っているから」

びっくりしたように目を睨り、飼い主に怒鳴り散らされた犬のよう  
に目を伏せた。

白い髪の毛から、耳が垂れているのが見える。

（…か、可愛く見える）

思わず、うろたえてしまふ。

今日は変な日だ。

ありえないことを感じたり、非常に怒りっぽくなっている。

「先刻」

「なに」

「先刻、赤い髪の……サツティを苛めたのはどうしてだ？」

「苛めてなんかいませーん」

エウリデイス・ルニース・レイ・ムルティフ。

神聖帝国の名家の嫡子にして、ムルティフ家の次男。

昨年、聖地で聖女の任を解かれた少女と、神の前で誓い合ったという。

その新妻が妊娠という話題が、敵地であるベルラデ山でも話題になっていたのだ。

宿敵の近況とゴシップに、どこもかしこも姦しかく、ナハールの神経を苛立たせた。

そんな中、突然部下の一人が、一人芝居を始めた。

おそらく自分の関心をおうとしたのだろう。

間違いなく己の信奉者だろう部下は、宿敵の新婚生活を茶化して演じていた。

それは、相手を貶し、貶める芝居で。

酒屋で酒気が高じた男たちがやるような、卑猥な言葉としぐさが丹念に練りこまれたものだった。

軍といっても、他国に比べ、ベルラデ山の規律は緩い。

美貌の魔人トルベジーノの前で始まった、卑猥な一人芝居はたちまち人だかりができた。

はやし立てる者。そこだそこだと、煽る者。もうちよつとと講釈たれる者。

各々面白がっていたが、サッティの芝居が過熱するにつれて、やや引き気味になっていた。

憧れの女性の前という意識に、昂ぶってきただろう。

芝居の内容が、段々と過激なものになっていった。

訳知り顔で新妻をくどき、ことに及ぶ場面になったときは、さすがに離れていた連中の半分は引いており。

ナハールの笑みも、引きつったものになっていた。

最後は、ナハールの拳骨で終わったのだが。

それから、みっちりサッティは、愛しの魔人トルベジーノに絞られたのだった。

「エウリディオのことを愛しているの」

息が止まった。

揶揄なら、失笑ともに否定していただろう。

からかいなら、拳で答えていただろう。

だけど。

平坦な声音ゆえ、エルノ・エルス的心を余す事無く曝け出してした。あまりに真剣な、縋るような問いに、ナハールは息をするのを忘れていた。

「なんで。何を言っているの」

「だって、サッティの演技を見ていたとき、すごく傷ついた顔をしていた」

感情が荒れ狂っていたのは、認めよう。しかし、エルノ・エルスが思っているようなものではない。

胸が苦しくなったのは。

どす黒く渦巻く想いの中、まぎれている甘い思いは。

「誰があんな奴のこと」

奇しくも、聖地でエウリディオが友に吐き捨てた台詞とまったく同じだった。

何も映し出さない、死人の瞳が猛禽の獲物を見据えるように眇められている。

窺い知れなさに、背中をベルラデ山の雪が落ちていくようだ。

「そうか」

それっきり、エルノ・エルスは何も云わなかった。

《魔と交じる穢れ者》 《ペカド》。

精霊と数多ある神々をあがめる人々をそう貶めた女が生まれたのは、  
同じ大陸のはるか遠くの荒地だった。

西方大陸西方部。

マティスタ草原と名づけられたそこは、草原と名ばかりの荒地だった。

岩影に、ひっそりと生える草。

微かな風にも、巻き上がる砂塵。

砂漠とはいかないまでも、羊や牛を酪農する草もなく。生物にとって一番必要な水も非常に少なく。

過酷な地だった。

神聖帝国の前身、エストレジャ王国の広大な領地の中で、そこだけが省みられることなく見捨てられた地だった。

それでも、人は住んでいた。

国とはいえなくても、マティスタの民と名乗る前に名づけられた人々は、慎ましやかに、貧しく暮らしていた。

一人の少女がいる。

いる、だ。過酷な地で、必要とされるのは男。

女など、家事がとりえの無駄飯ぐらい。

父は貧しさと栄養不足から、痩せ衰えて死に。

年端も行かない少女と、痩せた若い母親だけが取り残された。

男もたやすく命を奪われる過酷な地で、少女の母は、羊一匹という全財産で、少女を連れて富豪に身を売った。

羊飼いの少女は、ある日、帰ると家族にこういった。

「私は、《唯一の神》が地上に遣わした天の御遣いです」

家族―義父と、その妻たち。子供たちは、こぞって嘲笑し、食べかすを彼女に投げつけることを答えとした。

少女は諦めなかった。

キグルイと叩き出された後も、少女は諦めなかった。

マティスタ草原を出ると、周辺の地で、《唯一の神》がいかに優れているか。

何故、人が苦しまないといけないのか。エストレジャ王国が国教とする精霊信仰がどれほど墮落し、忌まわしいものか。

何かに憑かれたように、王国で説いて回った。

しかし、エストレジャ王国は少女の教え――クローチエ教を認めず、断固とした態度をとり続けた。

少女の言葉に耳を傾けた者の耳をそぎ落とし、少女の《唯一の神》を讃えた者の首を刎ね、少女の教えに信服した者を焼き殺した。

ついには、扇動者として羊飼いの少女を捕らえ、火刑に処した。

《唯一の神》の使徒を殺した！

少女の死をきっかけに、クローチエ教徒達は蜂起し、その勢いは瞬く間にエストレジャ王国を飲み込んだ。

最初の殉教者にして、先導者。世界では始めて《唯一の神》の御言葉を聴いた祝福されし者。

羊飼いの少女の名を、クローチエ。

彼女の遺志を継ぎ、偽りの神々を信じる者達を改心させたのが聖女アンヘリカ。

神の言葉を最初に口にした、クローチエの隣家に住んでいた親友にして、最初の弟子。

彼女が騎士に慈悲を与えると、その者は次々と奇跡を起こしていった。

エストレジャ王国を囲んでいた5つの国は次々と、国教をクローチエ教に宗旨を変えた。

そして、数年の後。

マティスタ草原は純白の地となった。

《唯一の神》を信じるものたちの聖地となり、精霊や己の神々を崇める者達にとって、狂人の巢となった。

《魔と交じる穢れ者》《ペカド》。

季節の移り変わりを受け止め、生き物の姿が失せる冬でさえ尊ぶ民を、教徒はそう蔑称する。

聖地の者たちは、クローチエ教徒は、ベルラデ山の魔術師<sup>フルホ</sup>や、周辺の民をそう呼び、貶す。

《魔と交じる穢れ者》《ペカド》を殲滅せよと、聖女と教皇の宣託が下ったのは聖託者クローチエが火にかけられてから百年後のことだった。

ムルティフ家の屋敷では、いつにもまして賑やかな宴が繰り広げられていた。

紅薔薇の間と呼ばれる大広間には、文字通り紅色の大理石をふんだんに敷き詰めている。

それも、入り口のほうから徐々に色が濃くなっていくという懲りようだ。

一番濃くなる場所は主賓が立つ場所であり、その意味からして演出

の一種なのだろうが…。

エウリディオは苦笑して、柘榴石を溶かしたように綺麗にゆれる葡萄酒を口に含む。

策略家にはそういう演出の才能も必要らしい。

婚約者のためにと広間の一つを薄紅色に染めた兄を思い浮かべた。

自分なら、婚約者に何かを送れといわれたら、素直に珍しい薔薇と送るだろう。

その点、兄は父に期待されるだけであつた。

剣を振り回して、戦闘用天馬に乗っているだけの自分とは大違いだ。

自嘲し、葡萄酒を飲み干した。

美味しいというより、酢を水で薄めたような舌触りだ。

本来は葡萄酒とは、味より香りを楽しむものだから当然といえば当然か。

暗がりに沈んだバルコニーから、広間から中の様子を伺うと、布が擦れあう音や笑い声が聞こえてくる。

母が接待しているとはいえ、主賓が一人かけているのに、この盛り上がりようはどうだろう。

「たそがれていますね。エウリディオ」

「ひどいですねえ。余韻に浸っている勝利者に対して、その言い方はないでしょう」

大広間から姿を現したのは、同僚のジユストだ。

こげ茶色の髪をすべて後ろに撫で付けた髪型のせいで、エウリディオより年上に見られることが多い。

白薔薇を模した燭台の合間を、色とりどりのドレスを着てさざめきあう貴婦人達。

聖女と結婚することになったエウリディオの祝い事なのだ。

「そうですね。しかし、落ち込んでいませんでしたか」

「嬉しくて呆然としていただけです。気立ての良いお嬢さんを妻にできるのですからね。夢心地に浸っていたんですよ。ジユストもそろそろ、身を固めたらどうです」

「おお！なんと嘆かわしいことよ！わが母上が、ここにもいるぞ」

両手を漆黒の夜空に広げ、ジユストは泣き崩れるふりをした。

最も、エウリディオは道化じみた所作をする友人に一瞥もくれることなく、空になった葡萄酒硝子杯を見つめている。

「エウリディオ、何か思わないのか」

「いえ、別になんとも。それとも、貴方、何かしていましたか」

「…いつも以上に荒んでいますね。そうですか。そうなんですね。まあ仕方が無いことです。夜明けに帰れば、『浮気ね！貴方』と怒鳴る女が屋敷に居座り続けることになりますからね。それで、憂鬱になっているんですね。ああ、可哀想な、エウリディオ！」

鬱々とした気持ちになっているのは、結婚に対する現実味がないからだ。妻となる聖女と会い、父と日取りを決め、お披露目もしている。

なのに、どこか宙を歩くような、頼りない現実感がいつも付きまとっていた。

こうして、友人に激励（？）されていても、不思議な気分陥ってしまう。

返事もしない彼を、言い当てられて黙り込んでいると勘違いしたジユストは、葡萄酒硝子杯を掲げる。

「さらば、独身時代に！乾杯」

「申し訳ないんですが、私のは空なんです」

「細かいのは気にしないことにしましょう。私のも、少ないですから。新たに生まれた戦場に赴く勇者に乾杯！」

「相当酔っ払っていますね。ところで、ミシエイラ嬢との間は進んだのですか？」

「エウリディオ…いつの話だい？彼女とは別れたよ」

「…先週の日曜日に、あなた達を見掛けたのですが？もうですか。まあ、4日といえば長く持ったほうですかね」

「そういわれますとね…。そういえば、先月エウリディオと交戦したナハールも色恋沙汰に困らないようですよ」

不意にジェストの口から出た名前に眉をしかめた。

「何と言いました」

「だから、彼女も、いろいろと噂があるそうです。エルノ・エルスと寝ているだの。アッティバの愛人だと。もしくは、ナハールの部下は、全員愛人である。とかねー」

いつになく真剣な面持ちになった彼をみて、ジェストは面白げに笑った。

真剣な表情を消し去ると、エウリディオは華やかな会場に背を向けた。

「結構ですよ。そういう下劣な噂話は、閨で彼女として下さい。もしくは、酒場でね」

胸がザワザワする。

不愉快だ。

彼女との因縁を知るくせに、同僚も。

ナハールのことを口にするジュストも。

「すみませんね。ナハールについての色恋は、春文学で取り上げられているんです。気になりますか」

「春本なんて読んでいるのですか。貴方は」

女に不自由しているわけでもないのに……と、友人の密かな楽しみに、エウリディオは頭を抱えた。

春本。あるいは、春文学。

今で言う、エロ小説である。

当然ながら、規制される春本だが、駄目といわれるほど盛り上がる。生活苦：糊塗を得るために書く貧乏学生から、己のセックスライフ、技を誇示したがる貴族が書いたり春本は多い。

「はあ、君はいつから監督生になったんだい。嫌ですね。新婚は、自分が遊びを規制される為ですかね。やたらと厳しくなる」

おどけたように肩をすくめて見せるジュストに、エウリディオは心地よさげに低く笑った。

「本当かどうかは知りませんが、実際引く手数多でしょうね」

自分の口から出た言葉に、なぜか胸が詰まる。

ベルラデ山の山頂を永劫に凍らす氷のような銀の髪。

奇妙な焦燥と、不可思議、不可解な安堵で胸が満たされる。

絶え間ない笑い声がひときわ高くなる。その声につられるように、大広間に視線を戻すと、そこには花嫁が居た。

身を飾る服装が白の色彩のみで構成されている女性が、男達に囲まれながら立っている。淡い金色の髪と透明感のある白い肌をしているだけに、真つ白な大理石像がたっているような印象を受ける。可憐さが印象に残る花嫁だ。

「愛らしい女性ですね。ヴァランティーヌは」

「そうですね」

「そっけないですね。というより、熱意が無い。嫌なんですか、彼女ほどの美女が！はあ、それとも戦場呆けが直っていないんですか？それとも、ナハールのほうが良いと？」

品位と教養、そして何より信仰心を重んじられ選抜される聖女。

聖女に任じられるこは、この上ない名誉。

幼少から聖典を徹底的に一字一句間違はなく覚えこまされ、神の奴隷としての意識を徹底的に叩き込まれる。

任命から10年あたりで、交代する聖女は、今では結婚とともに聖女の位を降りるのが慣習となっていた。

この上の無い銘がついた女を妻として迎える。それは、男にとって

も、その一門にとっても至上の名誉の一つだった。

6歳から聖女となり、良い偶像として過ごしてきた彼女を、妻として迎える。

そう、それは名誉なこと。

「誰があんな奴のことを。仕方のないことなんですよ。聖女を妻として迎える。ムルティフ家の男子としての宿命です。たとえ、帝国に居たままだとしても、彼女を妻に迎え入れさせられていたでしょうね。この婚姻は、必然なんですよ」

「エウリディオ。貴方―」

「どうしました」

「まるで、浮気をした亭主が言い訳を考えているように見えたもので……」

仄かな闇に沈むバルコニーに、静寂が下りる。布がこする音も、しない。

友の背中から冷気が漂ってくるのは、気のせいだろうか。

「エウリディオ……」

「誰が、浮気ですって？」

「いえ、ただの例えであって……深い意味はないですよ」

「意味が無くても不愉快です」

「なんですか。それは。非常に愉快なことを仰っているようですね。それは、仕返しですか。」

「違いますつて。あのですね。そういう意味では、ない、です……」

やおら襟元を掴まれた茶髪の青年の言葉尻が萎れていく。

「よくわからないですけど、すみません。ごめんなさい。すみませーん」

「いえいえ。よくわかりましたよ。そう思われているなんて……。エリユニース嬢様との仲を取り持ってあげましょう」

「うおおっお」

エリユニース・オリエ・レイ・ニヴェール。

かつてはエウリディオの婚約者の一人であり、数々の色恋騒動を起こした少女である。

彼と義理で踊っただけの令嬢を、聖地の外まで追いかけて打ち据えたり。エウリディオと婚約中であっても、目があった騎士を追い掛け回したり…。

いわゆる、痛い子ーいや乙女である。

「ええええええ。止めて下さい。それだけは、やめてください。エウリディオ、君は本当に僕の友人なのかあ!？」

「今、考え中です」

「待ちたまっ！間に合ってる！間に合ってるぞ！」

慌てふためく友人の言葉を右から左へと聞き流しながら、エウリデイオは会場へと戻っていった。

彼も―数少ない打ち解けて話せる友も逝った。

それなのに、山を憎いと思ったことは無かった。

馬鹿だと思う。愚かなと、思う。

いいなりになったふりでもすれば良い。改宗したふりでもいい。

圧倒的に有利なクローチエ教を、敵に回すとは…。

「どうしようもない愚か者ですよ」

そのとき、かの者の面影が、脳裏によぎったのはなぜなのか。

答えは、腕の中にあつた。

#### 4・何故助けた(前書き)

2週間ぐらい、放置してすみません。( ; 旦 )  
感想、誤字脱字、ぷりーず

ポイント、入れてくださった方々。ありがとうございます。¥ ( ^ ) /

#### 4・何故助けた

絹のような銀髪だと、寝乱れた髪を指で梳<sup>す</sup>けば、薄闇にも鮮やかに銀の光がきらめく。

手から髪を落とせば、火からの照り貸しを受けながら、銀の奔流<sup>ほんとうりゅう</sup>が闇に広がった。

「本当に、銀だ」

「坊ちやまは、もしかして髪フェチかしら」

「だから、坊ちやまと」

「良いじゃない。本当のことでしょう」

「魔女も貴女にぴったりですよ」

「独創性が無いわねえ」

「罵倒に独創性も何も無いでしょう。そのようなものに独創性を求めるとは、戦いに美学をもとめるようなものですよ。不毛です」

「アンタが、そんなこといって言いのかな。否定するような言葉を吐いちゃって」

「どうぞ、ご勝手に。誰も信じませんよ」

「わあ、卑怯よねえ」

「卑怯で結構」

「民の見本たる騎士が、そんなコト言つては駄目ねえ」

唇にそつと指を置かれただけで、反撃の勢いはたちまち喉で失われ。

冷徹な軍人であるくせに、どこか人の良さを漂わせる彼。そんな彼が、押し黙ってしまい、ちくりと胸が痛んだ。

ああ、別にそんなことを言うつもりではなかったのに。

背中にあたる厚い胸が、熱くて心地よくて、なきそうになる。

土製暖炉は前になるのに、寄りかかる胸板からじわじわと熱が伝わって、身体が変だ。

でも、身体とは別に心のどこかが冷え冷えと寒いのは、どうしてもどうしてだろう。

もう偽れないのも分かっている。

男としてみていた。

惹かれていたのも。

女としての幸せをかみ締めている。

なのに、どうして。

温もりを感じるたびに、温もりが強く胸を暖めるほど、冷たくなつていくのだろう。

「ナハール」

火の照り返しが、ナハールの清流を思わせる銀髪を淡く輝かせた。

その奔流の中に、顔を埋めながら、苦しげに男は囁いた。

「ナハール」

「何度も呼ばないでよ。もう、犬じゃないんだから。って、子供みたいな顔をしないでよ」

『そう何度も呼ばなくても、聞こえております。子供みたいな顔をなされますな』

何故、貴女は同じことを言うのです。

忌まわしい既視感に、エウリディオは苦虫を噛み潰したような顔で呻いた。

天才少女と呼ばれた彼女。

持てはやされ、おごり高ぶっているだろう少女のお守りを命じられたのは何年前か。

もう、二年は経つだろうか。

名声と奔流<sup>ほんりゅう</sup>を目当ての市長に連れられてきたのは、幼い少女だった。

聖句を騎士並みに唱え、繰り出す様は、天才少女の名に恥じないものだった。

予想通り、性格には難があった。

どこぞの魔女のように、年下の癖に、年上ぶり。

彼に、もっともな論理で言いくるめ。

聖巫女らしくしなさいと嗜めようなら、逆に神聖騎士であった彼にらしくないと欠点をあげつらったものだ。

——どこかの誰かに似ていると、教育係に任命されたことを愚痴ったものだ。

やがて、立場を理解したのか。使命感に目覚めたのか。

あれほど、反抗的な態度が、見る見るうちに聖巫女らしくなってい

ったのは。

美談として利用しやすい彼女を、上層部が放っておくわけが無く。

小競り合いが絶えない国境付近に配置されたと聴いたのは、とつくに聖地を出た後だった。

その後のことは、記憶にとどめておきたくないことばかりだ。

よくある話で、とりわけ珍しくも無い話。

数えるのも馬鹿馬鹿しい、ありふれた悲劇の中に彼女の死は埋没した。

聖地とベルラデ山の些細な小競り合い。戦史にもならない。

噂程度の小規模の戦いの最中、避難する神官と巫女たち。

避難する街道で、聖地側の騎士とベルラデ山の魔術師ブルホが出会い頭に戦闘に突入したのは、よくある話で。

そういう非常事態に限って、強力な魔術師ブルホがその場にいたのは、ありふれた話で。

流れ矢や的を外した魔術が、木々に当たるのはよくある話で。

戦闘に良く使われる魔術が、火系魔術であることは当然で。

焼弾と呼ばれる火系魔術が、よく燃える木々の中で使用された場合。

……どのような結果が生じるかは、子供でも分かることだった。

避難民が巻き添えを食い、全滅したと聞いたのはその直後だった。

何故一緒についていかなかったのかと、己を責めつつ、焼け野原となった森を必死に探索した。

黒く焼けた森の姿に、魔術師<sup>ブルホ</sup>たちへの憎悪を育てながら。

墨のように真っ黒になった彼女を見つけたのは、奇跡だった。

ただ。

辛うじて息があるうちに、彼女に会えたのはよかったことなのだろうか。

苦しみ悶える彼女を、この腕に抱けたのは良かったことなのだろうか。

息絶えた彼女を見つけたかった。

末期の苦しみを、目の辺りにしたくなかった。

息を切らせ、伏兵の危険性を叫ぶ部下や同僚達を振り切って探したのに。

後になって、そう思う。

死にたくない死にたくないのと、錆びた鈴の声で断末魔を上げる彼女を、見つめることが出来なかった。

食い込む手が――

「エウリディオ？…坊ちやま、眼を開けたまま寝る癖があるのねー」

「そんなわけ無いでしょう」

「貴女は、人殺しなんですね」

何を言い出すんだ、この坊ちやまは。

そんなことをありありと瞳に浮かべ、ナハールはまじまじと男の顔を見つめた。

「誰だって、人殺しだと思うわ。そういう坊ちやまこそ、人殺しでしょう。どうしたのかしら、エウリディオ」

「どうしてでしょうね。名前を呼ばれると、非常に馬鹿にされた気がするの」

「変なことをいうからじゃない。頭、大丈夫かしら？エウリディオ」

「……………」

「わがままね。愛称の坊ちやまもいやで、エウリディオも嫌で」

「ルニース」

「え？」

「ルニースと、呼びなさい」

耳元で囁く彼の声音は、想像もつかぬ艶やかな響きをもって、彼女の耳に届けられた。

戦場で交わされる恫喝でも侮蔑でもない、その甘ったるい声音に、ナハールは背筋がぞくりとするのを感じた。

エウリディオは低く喉を鳴らして笑うと、抱きしめる腕の力をますます強めた。

「ちよつ、あ、アンタって、どうしようもないほど、性格悪いわね」

彼女の顔が赤いのは、暖炉の火のせいだけではあるまい。

返答の代わりにその額に口づけた。

忘れよう。今だけは。

そう、今だけは。

心地よい疲労は初めてだから。

だから――

いつまでもまどろんでいたい。

乳母に抱かれているときとは違う。恋人たちを抱いていたのとも違う。

不可解な安堵で胸が満たされる。

これを、愛おしいというのだろうか。

この切なくなるような優しい気持ちを、エウリディオは知らなかった。

今までは。

後、数刻で断ち切らなければならぬ想いを、持て余しながら、聞けずにいた疑問を聞いていた。

「何故助けたのです」

「何のことよ」

「一ヶ月前のエルノ・エルスから、彼の攻撃から私を助けたことです」

魔人達でも、一番厄介な男。<sup>トルベジノ</sup> 何の因果か、彼―エウリディオは、彼とぶつかることが多かった。

いや、どう考えても奴のほうからエウリディオを付けねらっている  
としか思えない。

戦場でぶつかるたびに、奴は底冷えのする視線でエウリディオを貫き、殺意の刃を振りかざしてくる。

それもありとあらゆる手段で。

今もって思う。

今生きているのは、奇跡以外ありえない

洞窟<sup>どうくつ</sup>に誘い込まれ、生き埋めと毒ガスの二重攻撃。天から降る氷槍の嵐に、暴風。

なにより、恐ろしいのは――あの黒い瞳。

爬虫類をうかがわせる無感動な瞳。

その闇の瞳が、自分を捉えるとき異様な熱が籠もるのを、何時も感じていた。

それは親の敵を見つけたときのような。

他者をも飲み込み滅ぼさんとする激烈な熱だった。

「さあ。わからないわ」

はぐらかしたいのが見え見えな言葉に、桜色に色づいた白い腕を、思わず掴む。

あんなふうに命を狙われて。

卑劣極まりない手段で、命を狙われ。

けれど、「悪夢の白」が向けてくる暗い感情に、ぎらつく眼。

あれは、嫉妬だ。

「何を、ふざけたことを云っているのです。私が言っているのは、一ヶ月前のエルノ・エルスからの攻撃から助けたことです」

「忘れたわ」

「あのエルノ・エルスの目は、まるで恋敵を見るようでした。そう、恋人を取られた―」

「白いワンちゃんは、ただの同僚」

見上げてくる紫色の瞳には、邪推をするなど言っている。

誰にでも、身を任せる女だと思っているのか。

フライト  
矜持が見え隠れし、それは男の疚しさを的確についてきた。

「しかし。噂話では」

「噂話がどれほどのものか。聖地で暮らす、坊ちゃまなら嫌というほどご存知ではなりませんこと？あゝ。傷のせいか熱っぽいのよね」

だから、どうして胸板の間に顔を埋める必要がある。

気恥ずかしくて、何もいえなくなる。

疑ったわけではない。

ただ、気になったわけで。

どうして、こつも裏切つたような気分になるのだろうか。

疑えば、離れていくのだろうか。

尽きることの無い疑念は、じわじわと遅効性の毒のように、彼の心を蝕んでいくのを、誰よりもエウリディオは悟っていた。

ああ。それでも。

胸にあたる女のぬくもりが、得がたく、離しがたい。

離したくない、このぬくもりを。

抱き寄せた女の肢体が、ますます熱を帯びてくる。

しかし、別れの時は、刻一刻と近づいていた。

#### 4・何故助けた（後書き）

あと。1話です。

最終話は、20日の予定です。  
よろしく、



## 5 ……どうかしてる

雨はいつの間にか止んでいた。

水の中に居るような濃密な水の気配は何処かに去り、変わって躍動する木々の芳香が立ちこみ始めている。

戦士であり、魔術師でもあるナハールは、小屋の外の<sup>フルホ</sup>変化を感じ取っていた。森は陽を浴び、また命の謳歌を謡うのだ。

ささやかな―しかし、劇的な変化。

湿った森の空気が、しつとりと小屋に流れこむ。

もうすぐ夜が明ける。

明けない夜もあるというのに、どうしてこのいとしさが感じられる夜はすぐ明けてしまうのか。

仇も取れないというまま状況が状況なだけに、余計に腹立たしい。

己を抱き枕のように、抱いて安らかに眠る男の頬を思いつきりつねりたい。

怖気が経つほど整った顔立ちが、子供っぽい寝相を浮かべているのは、なんともいえない。

……可愛い。

不覚にもそう思ってしまう。

ひどく切ない息を漏らした。

…だめだろうな。彼を想うことも。

今すぐにでも、どこかに逃げ出したくなる。

焦燥と不安。恐怖と安息。相反するの激情が、狂った風のように、冷たく吹き荒れていた。

バラバラな衝動に、身体が引き裂かれそうで、ナハールは人知れず苦悶の声をあげた。

エルノ・エルスことは、ただの噂に過ぎない。以前から、そういうわさはあった。もっとも、彼女自身親しくした異性とは必ずうわさになったため気にしたことは無かった。

思いもしなかった相手から、エウリディオから聞かれたときは、焦ったけれど。

しかし……。誘惑しただけであっさりと、口を閉じた彼も腹立たしい。

いや、これっきりなんだから、根掘り葉掘り聞かれるよりは良い……  
だろう。

もぞもぞと腕が動くのを見て、ナハールはそつと服を引き寄せた。

「朝ね」

「ああ」

葉の隙間から差し込む朝日が、エウリディオの淡い金髪を輝かせる。

言葉を聴くのが辛い。

「私ね」

聞き取るのが難しい小声で、ナハールは呟いた。

聴かれなくても良い、聴いてほしい。

金色の朝陽に染め上げられていく彼女は、今まで見てきたどの女よりも美しかった。

真珠貝から産まれた美神そのものの姿で、ナハールは口を開いた。

「貴方のこと、嫌いよ」

「分かっている。私だ」

それが、別れの挨拶。

どうせなら、もっと素っ気無くいつて欲しい。

そんな辛そうな表情でいわないで。

戦場で殺しあう仲でしょう。

罵り合う仲なのよ。

優しい声音でいわないで。

見知らぬ他人のように、冷たく言って。

顔を上げたときには、そこには誰も居なかった。

地上の何処にも居ない人間たちに向かって、呟いていた。

無意識に、意識的に避けていた答え。

笑い話にもなりやしない。

あの美しい朝陽を見ていたら、どうしても言わなければならないと思ったのだ。

——衝動のまま、何を言おうとしていた？

何を口走りかけた？

あの挨拶のまま。あの言葉に偽りは無い。

しかし、その偽り以上の真実の言葉を、口に出しかけたのではないな

かったか？

ねえ、姉さん。

ねえ、父さん。

ねえ、キヴィリト。

ねえ、ルルシアン。

ねえ、ヒュツタル。

貴方たちの恥であり、誇りである私は、どうしようもない愚か者です。

貴方たちを殺した男の血族を、愛した女がいます。

恥辱を与え、苦しみを与え、幸せを、何気なく踏み潰した男の血族を愛しました。

貴方たちを殺した男の兄弟を、愛しました。

安心してください。

殺しますから。

何を犠牲にしても、殺しますから。

たとえ、私の心臓が破れても。

首だけになっても殺しますから。

でなければ、浮かばれない。

貴方達が、あまりにも哀れだ。無残です。

それでも。

それでも。

末期の苦しみが、これほど伝わってくるというのだ。

それでも、私は――

ごめんなさい。

熱い涙が、優しい朝陽が照らす頬を流れる。

何もかもが美しく、悲しかった。

止まることの無い透明な雫に、ナハールはすすり泣いた。

仇を取れないことを嘆き泣いているのか。

愛も得ることも無い己を、憐れみ泣いているのか。

これからの悲劇を思っ、泣くのか。

誰のために流す涙なのか。

それすら分からぬまま、ナハールはただ泣いた。



いったい、何人が覚えているのか。

ベルラデ山を揺るがした一大醜聞。<sup>スキャンダル</sup>

紅雷の魔術師<sup>ブルホ</sup>ファルズイーンの末裔の一つ。ベルラデ山の政治と経済をつかさどる評議会の一角を占めるデルカシユ家で起きた醜聞。<sup>スキャンダル</sup>

それは、ひと夏の大嵐のようにベルラデ山で起こり、通り過ぎていった。

その家には姉妹が居た。

艶やかで派手な姉。

優美で大人しい妹。

不幸だったのは、父親とその友人がタチの悪い人間だったことか。

魔薬に手を出した拳句、姉妹を娼婦宿に売った。

姉娘の婚約者とその友人二人を殺害し他だけではなく、閉じ込められていた姉娘を手にかけた。

名家であるゆえに、名誉を守るためにも。

そのような醜聞を、スキヤンダルベルラデ山の上層部が許すはずも無く、姉妹の父も処刑され、妹も行方知れずになった。

外聞では、そうなっている。

しかし、ナハールは知っていた。

優美で大人しいと思われていた彼女は知っていた。

慎ましく身を包むべし。黒い布で顔を隠し、生涯の伴侶以外は顔をみせることなかれ。

幸い、古くから続く慣わしのお陰で、容貌を知るものは、死んだ父と姉以外いない。

古臭い因習をかたくなに、まもり続けていたデルカシユ家の家風が、彼女の命を助けた。

父はそのような人間ではない。

小心者で、でも優しかった父。

では。

姉を、誰が殺したのか。

聖地の意向を受け、ベルラデ山を裏切り続けている人間の滓<sup>カス</sup>がいる。

母の兄―伯父。

エウリディオの兄と手を組み、ベルラデ山の内部崩壊を企んだ裏切り者。

…愛している。

迷いの森のせいだ。

最後の言葉を口にする前、彼女の目がそういていた気がする。

そう。

気がするだけだ。

そんなはずは無いのだから。

「……どうかしてる」

恐ろしかった。

次あうときは殺し合いの場なのだ。

軍人としての自分。

男としての自分。

せめぎ合い、互いに互いを責めているのが分る。

自分自身が、分裂しそうだ。

苦しい。

胸が引き裂かれそうだ。

心の臓が押しつぶされ引き裂かれそうな痛みを訴える。

押し潰され、引き裂かれ、針をつつかれるような痛みを覚え、手に衝撃を受ける。

小屋の壁を、叩いていた。

戦場で年端も行かない少女を殺したときも。友と思っていた同僚に

裏切られたときも。父からの冷たい言葉を投げかけられたときも。

息が出来なくなるほど苦しくなったことは無かった。虚無に苛まれ、苦しむことも無かった。寒々とした思いに支配されることも無かった。

こんな気持ちにさせる彼女が恨めしい。

けれど、次あうときは戦場だろう。

味方がベルラデ山の兵士を殺し、ベルラデ山の兵士達が味方を殺す。

虫けらを踏み潰すような無機質な瞳で。豚を屠る肉屋の眼差しで。

もし。

殺意を滲ませて、サファイアの瞳を冷たく輝かせて、殺しにきたら。

どうすれば良い。

あの女が、冷たい眼差しになるのが、怖かった。

あい見えないまま。二度と会うことも無いまま、このままそれぞれの人生の軌道に戻るのだろうか。

数少ない例として生きて退役するかもしれない。

別の男と心を通わせ、添い遂げるかもしれない。

そのとき、自分はどつするのだろうか。

遠く聖地で、心の中でナハールの幸せを祈るのだろうか。

そんなの許さない。

絶対に許さない。

そうだ。どうして、あんな売女のことを信じられる。昨日のことを話してしまうかもしれない。話さずには居られないだろう。敵なのだから。エルノ・エルスにも話すかもしれない。

そうなる前に、殺してしまえ。

殺すしかない。

そうすれば、二度とあの女のことでは心煩うことは無い。

そう、この手で殺してしまえば。

引き連れた笑い声がのどから漏れる。

馬鹿な女だ。

身体を許した男が、どれほど卑劣でどれだけ品性が劣る人間かも知らずに。

胸を震わす、身体を宿す歡喜の熱を、踏みにじりながら、ただ嗤う。

そうだ。

愛してなんかいない。

愛してなんか。

あの女を、魔女を。

愛してなんか。

ありえない。

あの女を、神に従わぬ反逆者の裔を。

「会つのではなかった」

夢にまどろむ森の精霊が聴いた呟きは、誰のものだったのか。

<了>

## 5・・・どうかしてる（後書き）

敵味方の男女が恋に落ちて〜というのは、やはりときどきしますよね。

このお話も、今は閉鎖？されてしまったお題サイト様でみかけたとき、ひらめいたものです。

作文のような小説を書く私にとって、ものすごく頭がいたくなる執筆でした。

その分、なかなか好評でよかったです。

感想、誤字、脱字、そのほかの指摘点がありましたら、ぜひお知らせくださいませv

2010/5/23

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9244k/>

---

騎士と魔女 ~ Knight and witch ~

2010年10月13日15時36分発行